

## 実践的教員養成のあり方に関する研究 II

—スクールボランティアと教育実習の関係から—

原 清治・芦原典子

〔抄 録〕

教職志望の学生にとって、在学中に教育実習などの教育現場を体験することは、教職に対する職業アスピレーションを強化、あるいは減退させる効果があり（黒崎東洋郎，1999），また子どもたちから「先生」という立場でみられることによって、教職に対する「職業的アイデンティティ」が形成され始める（今津孝次郎，1979）とされている。教職志望者の最終的な目標は「教師になること」であるが，こうした学生にとって教育実習やスクールボランティアはどのような役割を果たすのだろうか。

本研究は，教職志望者に対して，教育実習修了後に実施した質問紙調査の結果をもとに，学生の教職に対する意識や教育実践に対する考え方に注目して分析を行った。分析の結果から，教育実習修了後，教職に就きたい気持ちをもっとも強くなった学生ほど，実習後にスクールボランティアをしており，さらに卒業後の進路は，教員採用試験に不合格であっても，スクールボランティアをしていた学生ほど教職に向いていることが明らかとなった。

キーワード 実践的教員養成，スクールボランティア，教育実習，職業アスピレーション

### はじめに

大学における教員養成は，大学の講義を中心とした理論的教員養成と，教育実習や介護等体験などを中心とした実践的教員養成の大きく2つに分けて考えられてきた。しかしながら，大学における教員養成カリキュラムの中でも，とりわけ実践的教員養成は，学校現場との連携によるところが大きい。その中心にあるのが教育実習である。

教育実習の目的としては，大きく次の2点があげられる。ひとつは，文部科学省の掲げる「教師に必要な基盤の確立」であり，もうひとつは，大学で学んだ理論と現場での実践を結合すること，すなわち「理論と実践のインテグレーション」（藤枝静正，2001）<sup>(1)</sup>である。さらに教育実習は，教職に対する「職業的アイデンティティ」を形成させる（今津孝次郎，1979）<sup>(2)</sup>

数少ない現場経験の場として捉えられてきた。

また、佐久間亜紀(2003)は、従来型の教育実習の特徴を「①大学の正規のカリキュラムとして(大学主導型)、②教育職員免許取得を前提に(免許取得型)、③大学最終学年次に(最終学年型)、実質的な指導を実習校に一任しつつ(実習校一任型)、⑤二週間から四週間程度連続して行われる(短期集中型)」<sup>(3)</sup>の5点に整理して指摘している。

今日では、こうした従来型の教育実習に加え、スクールボランティアやインターンシップによって、現場体験をする学生が増加しつつある。その背景として、高齢化した教育現場に新たな空気を入れて活性化するというねらいとともに、教職志望者の側からは、事前に数多くの教育現場の実践経験を積むことによる「職業的社会化」の効果が期待できることがあげられる。

しかしながら、スクールボランティアやインターンシップは、従来の実践的教員養成カリキュラムに属する活動ではない。にもかかわらず、スクールボランティアやインターンシップを利用して「職業的社会化」を早期にさせるべきであるという風潮や、学生からは、活動するか否かによって、教員採用への影響を心配する声も年々増えているのが現状である。

このように、学生の教育実践体験は豊富化、多様化してきている。佐久間(2003)はこのような変化を「教育実習の多様化」の一つとしてとらえているが、本研究では、教育実習とスクールボランティアは本来異なる機能をもつものであるという視点にたち、その両者がそれぞれどのような機能を果たしているのかを、実証的に明らかにすることを目的としている<sup>(4)</sup>。

その際、教育実習とスクールボランティアの関係から想定されるパターンの分類モデルは図1の通りである。

- ①スクールボランティアをせずに教育実習のみを行った学生群
- ②教育実習前にスクールボランティアをした学生群
- ③教育実習前後にわたって継続的にスクールボランティアをした学生群
- ④教育実習後にスクールボランティアをした学生群

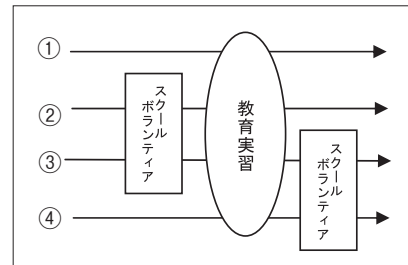


図1 教育実習とスクールボランティアの関係モデル

## 1. これまでの研究成果<sup>(5)</sup>

本研究は、『実践的教員養成のあり方に関する研究—スクールボランティアと教育実習の関係から—』(佛教大学教育学部論集 第16集, 2005)及び『スクールボランティアがもたらす教育的効果の研究』(佛教大学教育学部学会紀要 第4号, 2005)の延長上に位置づくものである。

昨年度は、教育実習を行う直前に実施したアンケートの分析に焦点をあて、図1に示した関

係モデルの①および②に関する分析を中心とした。その中で明らかとなった点は、大きく以下の2点である。

#### (1) スクールボランティア経験を分岐する決定因

まず、スクールボランティアを“する”“しない”に影響を与えている変数を、意識のレベルに注目した場合、最も影響していたのは、「子どもとかかわる仕事をしたかったから」という教職の志望理由であった。すなわち、自分自身が「子どもとかかわりたい」から、あるいは「教師になりたい」という要素がその活動有無を規定する要因となっていることが明らかとなった。逆に、教育実習の目的は「力試し」だと考えている学生は、スクールボランティアをしていないことがわかった。本研究の趣旨にそっていうならば、スクールボランティアをしている学生は、教職や教育実習に対して明確な意識をもっている学生であるということである。

#### (2) 教育実習前にスクールボランティアをする「効果」について

さらに、スクールボランティアの具体的な「効果」を測定するにあたって、スクールボランティアの活動形態で分類モデルを作成し、分析を行った結果、活動期間は単に長ければその分「効果」が得られるというものではないということが明らかとなった。

まず、「教職」とは何かを知るという機会として、もっとも「効果」があるのは「学内」で「単発」で行うスクールボランティアであった。つまり、教職志望度が低かったり、明確な履修理由がなかったりしても、学内で数日間の活動することは、「教職とは何か」といった点を学校現場でじかにみることができる。逆に、教育実習のそれに近い効果を得ようとするならば、「学内」で「長期」にわたって行うスクールボランティアが一番効果のある活動であることが明らかとなった。

また、教育実習にあたっての「不安」は、学内活動においてのみ生じる「効果」であることも明らかとなった。「授業をする」ことに対する不安はスクールボランティアによって、増幅されるものの、教育実習直前の教職志望度は高く、活動によって不安もある程度解消されているところからも、「不安」の増幅というマイナス「効果」は決して、教職への意識そのものを減じさせるものではなかった。

本稿では、これらの結果を踏まえた上で、図1で示した教育実習とスクールボランティアの関係モデルにおける①と④、すなわち教育実習修了後のスクールボランティア実施の有無に焦点をあて、その分析の対象とした。その際の分析の視点は以下のとおりである。

- i. 教育実習のみの学生(①)と教育実習後にスクールボランティアをした学生(④)とを比較することによって、実習後にスクールボランティアを行うことの「効果」を測定する。
- ii. スクールボランティアが、教員採用試験の合否や、卒業後の教職へのアスピレーションに影響を与えているか否かを検証する。

## 2. 調査の概要

質問紙調査の概要は以下の通りである。

- 調査期間 平成16年12月  
 調査対象 A大学教職課程履修の大学生  
 サンプル 348 (サンプルの属性は、表1・2の通り)  
 回収率等 自記式質問紙調査の手法を用い、教育実習修了者に対して実施する「教育実習事後指導」の講義中に行ったものであり、回収率は100%  
 分 析 統計パッケージ SPSS Ver.12.0J, 表およびグラフの作成は Excel2003<sup>(6)</sup>  
 ※ 数量化Ⅱ類プログラムについては SPSS Ver.11.0J を使用

表1 サンプルの属性

		SVあり	SVなし
学科	仏教学科	5.3%( 10)	8.3%( 13)
	史学科	4.7%( 9)	19.7%( 31)
	日文(国文)学科	11.6%( 22)	17.8%( 28)
	中国文学科	2.6%( 5)	2.5%( 4)
	英文学科	5.3%( 10)	8.9%( 14)
	教育学科	47.4%( 90)	14.6%( 23)
	生涯学習学科	13.7%( 26)	5.1%( 8)
	社会学科	3.2%( 6)	12.1%( 19)
	応用社会学科	5.3%( 10)	6.4%( 10)
	社会福祉学科	1.1%( 2)	3.8%( 6)
	その他	0.0%( 0)	0.6%( 1)
回生	3回生	26.8%( 51)	7.6%( 12)
	4回生以上	73.2%(139)	92.4%(145)
性別	男性	37.9%( 72)	39.4%( 61)
	女性	62.1%(118)	60.6%( 94)
実習校種別	幼稚園	11.6%( 22)	3.8%( 6)
	小学校	28.9%( 55)	8.3%( 13)
	中学校	42.6%( 81)	36.9%( 58)
	高等学校	21.6%( 41)	54.1%( 85)
	養護学校	10.5%( 20)	4.5%( 7)
	計	54.6%(190)	45.4%(158)

表2 スクールボランティア経験の有無

SVなし	45.4% (158)
教育実習前のみSV	18.7% ( 65)
教育実習前後にSV	30.2% (105)
教育実習後のみSV	5.7% ( 20)
計	100.0% (348)

※ SV= スクールボランティアの略

## 3. 教育実習修了後のスクールボランティアの有無による差異

まず、ひとつめの分析視点である教育実習のみ行った学生と教育実習後にスクールボランティアをした学生にどのような違いがみられたのかについて検証したい。

教育実習修了後の分析にあたっては、スクールボランティア“する”“しない”を従属変数として質問紙調査における全ての変数とクロス集計を行ったが、本研究は属性以外の変数においてどのような違いがみられるのかを分析することを目的としているため、属性以外の変数を中心に特徴的なものを示し、その傾向をみることにする。また、スクールボランティアをせず教育実習のみ行った学生と教育実習後にスクールボランティアをした学生の違いを明らかにするために、参考として教育実習前のみスクールボランティアをした学生とスクールボランティ

アをせず教育実習のみ行った学生のクロス集計の結果も合わせて図示し、実習修了後のスクールボランティア有無による検証を試みたい。

表3は、性別、回生、学級委員や生徒会役員などの経験有無、教職志望度の各変数とスクールボランティアのクロス集計の結果であるが、性別や回生といった属性の部分においてスクールボランティアによる差異はみられなかったものの、高等学校までにおいて学級委員もしくは生徒会役員などの経験有無をみると、教育実習後にスクールボランティアをしている学生の方が学級委員等を経験していた。

表3 性別・回生・学級委員経験・教職志望度とスクールボランティアの関係

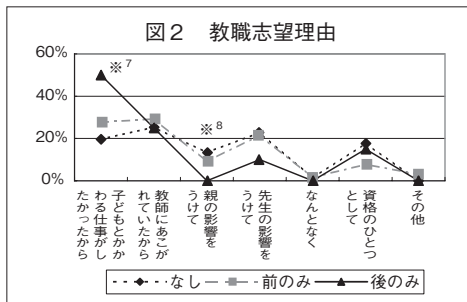
		なし	前のみ	後のみ
性別	男性	39.1% (61)	41.5% (27)	40.0% (8)
	女性	60.9% (95)	58.5% (38)	60.0% (12)
回生	3回生	8.2% (13)	29.2% (19)※ <sup>1</sup>	25.0% (5)※ <sup>2</sup>
	4回生以上	91.8% (145)	70.8% (46)	75.0% (15)
学級委員経験	あり	68.4% (108)	78.5% (51)	90.0% (18)※ <sup>3</sup>
	なし	31.6% (50)	21.5% (14)	10.0% (2)
教職志望度 (教師になりたい)	教育実習前	57.6% (91)	70.8% (46)	70.0% (14)
	教育実習後	71.5% (113)	81.5% (53)	95.0% (19)※ <sup>4</sup>
	現在	53.2% (84)	70.8% (46)※ <sup>5</sup>	85.0% (17)※ <sup>6</sup>

※<sup>1</sup> 前のみ  $\chi^2=16.529$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$     ※<sup>2</sup> 後のみ  $\chi^2=5.494$ ,  $df=1$ ,  $p<0.05$     ※<sup>3</sup> 後のみ  $\chi^2=4.022$ ,  $df=1$ ,  $p<0.05$

※<sup>4</sup> 後のみ  $\chi^2=5.325$ ,  $df=2$ ,  $p<0.1$     ※<sup>5</sup> 前のみ  $\chi^2=8.624$ ,  $df=2$ ,  $p<0.05$     ※<sup>6</sup> 後のみ  $\chi^2=8.209$ ,  $df=2$ ,  $p<0.05$

また、教職志望度との関係について、実習前、実習後、そして現在の各時期において「教師になりたい」と回答した数値を表わしているが、いずれも教育実習修了後がもっとも「教師になりたい」と答え、現在になると減少するという同様の波形がみられたが、「教育実習後」と「現在」に有意差が認められた。前のみスクールボランティアをした学生と比べてみても、とりわけ現在の教職志望度は、実習後にスクールボランティアをした学生の方が高く、スクールボランティアをしなかった学生の方が、教師になりたいという気持ちは低下していることがわかる。つまり、実習後からスクールボランティアをした学生の方が、「教師になりたい」という気持ちは維持され続けているのである。

また、教職を志望した理由とのクロス集計 (図2) で有意差が認められたのは、「子どもと



※<sup>7</sup> 後のみ  $\chi^2=9.242$ ,  $df=1$ ,  $p<0.0$

※<sup>8</sup> 後のみ  $\chi^2=3.014$ ,  $df=1$ ,  $p<0.1$

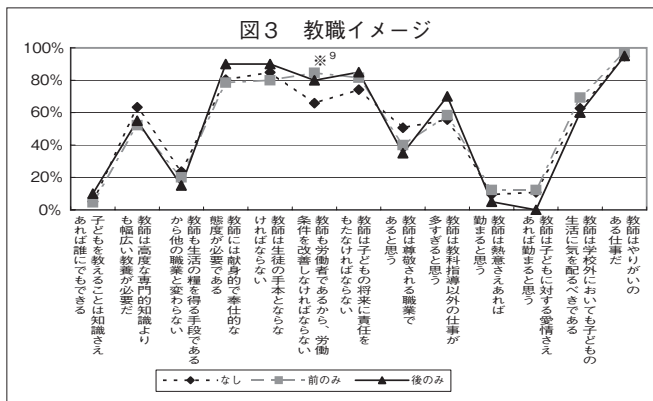
かわる仕事をしたかったから (S.Vなし: 19.6%, 実習後のみS.Vあり: 50.0%)」と、「親の影響を受けて (S.Vなし: 13.3%, 実習後のみS.Vあり: 0.0%)」であった。

これまでの教職志望動機に関する研究<sup>(7)</sup>によれば、教職志望の動機として、教師という職業に魅力を感じる「価値志向型」や「憧憬型」といった、教職に対するいわゆる「積極的動機」と親や

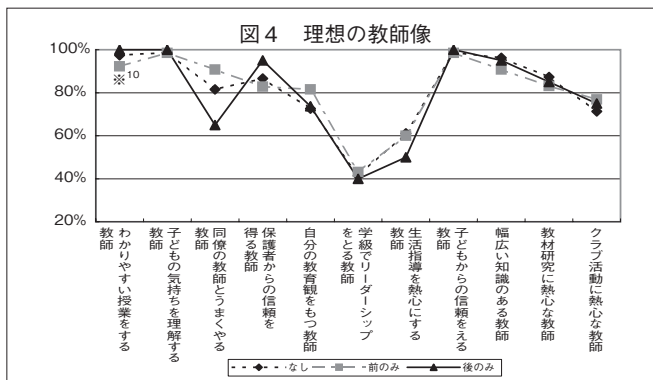
教師の影響を受けた「被勧誘型」や「漠然型」といった「消極的動機」の大きく2つのタイプに分類できる(藤原, 2004)。実習後にスクールボランティアをした学生に関していえば、親の影響などの「消極的動機」より、子どもとかかわる仕事がしたいという「積極的動機」をもっている学生ほど、教育実習で初めて子どもとかかわる経験を得たことによって、さらに子どもとかかわりたいという意識をもち、実習後にスクールボランティアをしたと考えられる。

以上の結果から、「子どもとかかわる仕事がしたかった」学生や、学級委員などの経験のある学生の方が、教育実習後にスクールボランティアをしている点、さらに、実習後にスクールボランティアをしている学生の方が現在でも「教師になりたい」気持ちを持続させている点が明らかとなった。逆に「消極的動機」によって教職を目指していた学生の方は、スクールボランティアをしなかったということがわかった。

しかし、こうした結果は、昨年度調査においても同様の傾向がみることができることから、教育実習後にスクールボランティアをした学生特有の傾向とはいえない。しかしながら、この傾向は、実習時期に分けた場合、実習後にスクールボランティアをした学生の方に強くみられたことは注目すべき点である。



※<sup>9</sup> 前のみ  $\chi^2 = 9.209$ ,  $df = 2$ ,  $p < 0.05$



※<sup>10</sup> 前のみ  $\chi^2 = 3.089$ ,  $df = 1$ ,  $p < 0.1$

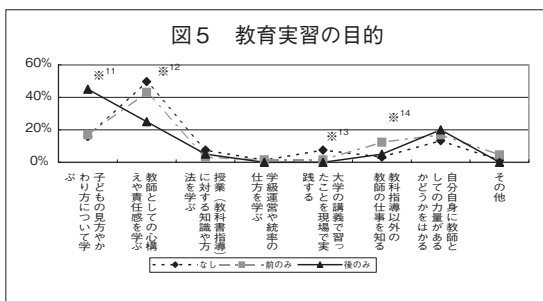
では、「教職に対するイメージ」(図3)やの学生が描く「理想の教師像」(図4)とスクールボランティア有無の関係はどうだろうか。ここでは、「教職イメージ」と「理想の教師像」に関する質問について「そう思う」と回答した学生を抽出し、それぞれグラフにしている。

クロス集計の結果、教職に対するイメージや自分が理想とする教師像といった、学生が描く教職に対する意識においては、教育実習後のスクールボランティアの有無を決定付ける変数にはなかった。すなわち、スクールボランティア“する”“しない”は、「教職に対するイメー

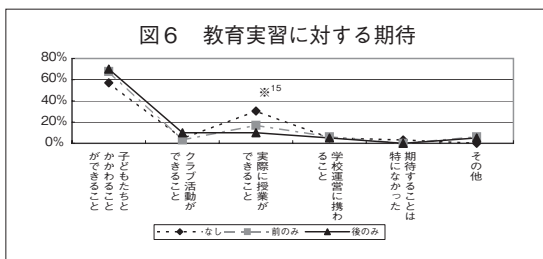


ジ」や学生自身の「理想の教師像」によって決定付けられるものではないということである。しかしながら、教育実習前のみスクールボランティアをしていた学生は、教職イメージとして「教師も労働者である」と感じたり、「わかりやすい授業をする教師」というより「同僚の教師とうまくやる」先生が理想であったりと、教育実習で初めて学校という組織や教師の仕事を見た学生よりも、職業的に社会化されている傾向をみてとることができた。

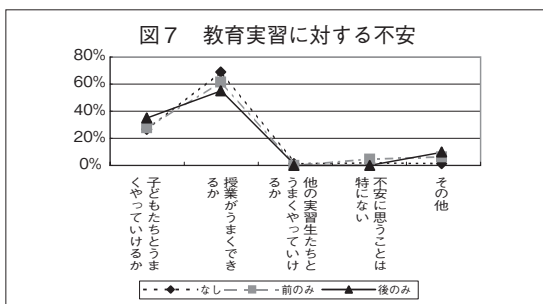
次に、教育実習の「目的」「期待」「不安」といった教育実習に対する意識についてみていきたい。これらの項目は教育実習修了後、振り返ってみて教育実習の目的は何だったと思うか、教育実習にあたって期待していたことや不安に思っていたことは何かについて聞いた項目である。



- ※<sup>11</sup> 後のみ  $\chi^2 = 9.664, df = 1, p < 0.01$   
 ※<sup>12</sup> 後のみ  $\chi^2 = 4.340, df = 1, p < 0.05$   
 ※<sup>13</sup> 前のみ  $\chi^2 = 3.108, df = 1, p < 0.1$   
 ※<sup>14</sup> 前のみ  $\chi^2 = 4.340, df = 1, p < 0.01$



- ※<sup>15</sup> 前のみ  $\chi^2 = 4.286, df = 1, p < 0.05$   
 後のみ  $\chi^2 = 3.650, df = 1, p < 0.1$



$\chi^2$ 検定の結果、有意差のある項目なし

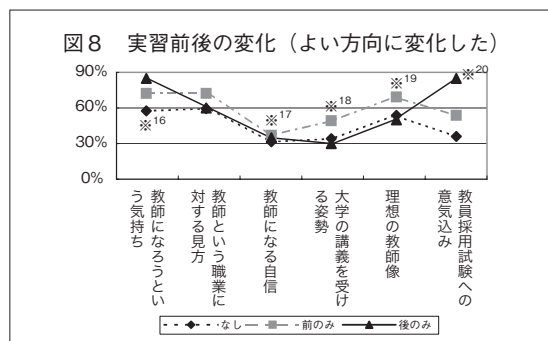
して意識が向いていることがわかる。逆に、「消極的動機」で教職を志望し、「教師としての心

教育実習の目的(図5)では、「子どもの見方やかかわり方について学ぶ(S.Vなし:15.9%, 実習後のみS.Vあり:45.0%)」ことであると回答した学生ほど実習後にスクールボランティアをしており、逆に「教師としての心構えや責任感を学ぶ(S.Vなし:49.7%, 実習後のみS.Vあり:25.0%)」と回答した学生ほどスクールボランティアをしていなかった。

教育実習に対する期待(図6)で有意差の認められた項目は「実際に授業ができること(S.Vなし:30.4%, 実習後のみS.Vあり:10.0%)」であった。また、教育実習に対する不安(図7)について、とくに有意な項目と認められなかった。

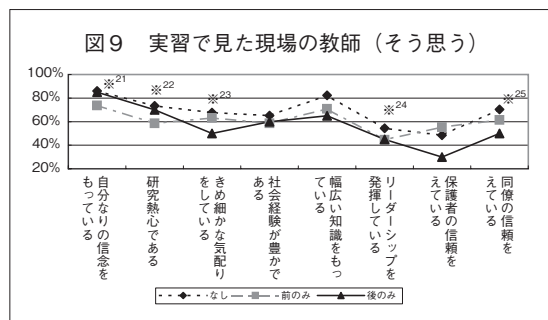
こうした結果から、「積極的動機」で教職を志望し、教育実習を振り返ったとき、「子どもの見方やかかわり方を学ぶ」ことが目的であると感じた学生ほど、実習後も子どもとかかわることを継続している。また、「同僚の教師とうまくやる教師」を理想の教師だとは、あまり感じていないことから、実習後にスクールボランティアをしている学生は、「子ども」に対

構えや責任感を学ぶ」ことが実習の目的で、「実際に授業ができること」を期待していた学生は、教育実習でその目的も果たせし、期待していた授業も実際にすることもできたため、実習修了後にスクールボランティアをする必要がなかったと考えられる。つまり、スクールボランティアをしなかった学生にとって、教育実習はあらゆることを経験する場であり、従来から教育実習の問題として指摘されている「イベント」的で「体験」的な教育実習でしかなかったといえよう。



- ※<sup>16</sup> 後のみ  $\chi^2 = 6.304, df = 2, p < 0.05$   
 ※<sup>17</sup> 前のみ  $\chi^2 = 12.245, df = 2, p < 0.05$   
 ※<sup>18</sup> 前のみ  $\chi^2 = 5.278, df = 2, p < 0.1$   
 ※<sup>19</sup> 前のみ  $\chi^2 = 5.443, df = 2, p < 0.1$   
 ※<sup>20</sup> 前のみ  $\chi^2 = 6.151, df = 2, p < 0.05$   
 後のみ  $\chi^2 = 17.700, df = 2, p < 0.01$

い方向に変化した」あるいは「とても強くなった」と回答した数値だけを取り出してグラフにしている。ここでは、「教師になろうという気持ち（S.Vなし：57.6%，実習後のみS.Vあり：85.0%）」と「教員採用試験への意気込み（S.Vなし：36.1%，実習後のみS.Vあり：85.0%）」の2点について、有意差が認められた。つまり、実習修了後、「教師になろうという気持ち」や「教員採用試験への意気込み」が、「かなり強くなった」学生、すなわち教職という職業に対するアスピレーションが強かった学生ほど、実習後にスクールボランティアをして



- ※<sup>21</sup> 前のみ  $\chi^2 = 4.779, df = 2, p < 0.1$   
 ※<sup>22</sup> 前のみ  $\chi^2 = 5.935, df = 2, p < 0.1$   
 ※<sup>23</sup> 後のみ  $\chi^2 = 12.163, df = 2, p < 0.01$   
 ※<sup>24</sup> 後のみ  $\chi^2 = 8.4352, df = 2, p < 0.05$   
 ※<sup>25</sup> 後のみ  $\chi^2 = 7.552, df = 2, p < 0.05$

以上の結果から、いくつかの解釈は可能であったが、いずれの項目も実習後にスクールボランティアをした学生を特徴付けるものではなかった。スクールボランティアをしなかった学生と教育実習後にスクールボランティアをした学生との差異は、実習前後の変化とのクロス集計の結果において、いくつかの特徴をみる事ができた（図8）。ここでは、各項目について実習前と比べて変化があったかについて聞いており、学生が「とても良

いたのである。言い換えれば、こうした学生にとって、教育実習は、教職に就きたいという意識がさらに向上させ、スクールボランティアをする、ある意味「きっかけ」であったといえる。

また、図9は、学生が教育実習でみた「現場の教師に対する印象」のクロス集計である。ここでは、各項目について、「そう思う」と回答したものをグラフにしている。ここでは、「きめ細かな気配



りをしている (S.Vなし:67.7%, 実習後のみS.Vあり:50.0%)」,「リーダーシップを発揮している (S.Vなし:54.4%, 実習後のみS.Vあり:45.0%)」,「同僚の信頼をえている (S.Vなし:70.3%, 実習後のみS.Vあり:50.0%)」に有意差がみられた。この質問ではいずれも「そう思う」と回答する方が,現場教師の印象が良かったということになる。しかし,グラフからもわかるように,実習後にスクールボランティアをした学生は,しなかった学生よりもいずれの項目も低い値を示している。このことから,実習後に活動をした学生は,教育実習において現場の教師にあまり良い印象をもたなかった学生であったといえる。

つまり,教育実習前には現場を見ていないため,現場の教師や現実がわからなかったが,教育実習を修了して自分が理想とする教師像や,現場の教師に良いイメージをもたなかった,あるいはもてなかった学生が,実習後にスクールボランティアをしたのである。しかし,スクールボランティアをしなかった学生と異なるのは,「子どもとかかわる仕事」がしたいという「積極的理由」によって教職を履修した学生であり,教育実習後の教職志望度も高かった点である。そのような学生は,教育実習で自分の理想と現実ギャップを感じても,「教師になろうという気持ち」や「教員採用試験への意気込み」といった,教職に対する職業アスピレーションが弱まることはなく,逆に強くなったのである。

また,実習前のみスクールボランティアをした学生と教育実習のみの学生では,多少有意差のある項目はあるものの,いずれも教育実習のみの学生と実習前のみスクールボランティアをした学生の波形は酷似している。つまり,スクールボランティアで現場を体験し,職業的に社会化し,「子ども」に対してだけでなく,同僚や保護者とうまくかかわる社会人としての「教員」の姿を見ても,教育実習で教師という職業に対するアスピレーションが強くなれば,教育実習は教員免許取得に向けてのひとつの「ゴール」でしかないのである。言い換えれば,実習後にスクールボランティアをするか否かは,教育実習における教職に対する職業アスピレーションに影響しているということである。その意味で教育実習は,教師への適正,あるいは教職志望度を図る「リトマス試験紙」の役割を果たしているといえる。

そこで,今回注目したのは,こうした教職という職業に対するアスピレーションが,教員採用試験の可否という直接的な結果を導くのか否かという点である。表4は,調査対象の中から教員採用試験受験者を抽出し,採用試験の可否とスクールボランティアを集計したものである。参考までに教育実習前後にわたってスクールボランティアをしていた学生とのクロス集計の結果も示してある。

表4 採用試験の可否とスクールボランティアの関係

		なし	前のみ	後のみ	前後
採用試験	合格	5.4%( 3)	10.7%( 3)	9.1%( 1)	16.7%( 8)
	不合格	94.6%(53)	89.3%(25)	90.9%(10)	83.3%(40)

採用試験の可否について、スクールボランティアの有無による可否への影響は、実習前後にわたってスクールボランティアをしている学生に若干認められただけであり、スクールボランティアはしたか否か、あるいはどの時期にしたのかは、採用試験の可否に影響しているとはいえない。教育実習後にスクールボランティアをした学生は、教育実習によって教職志望度がもっとも上昇した学生であることはクロス集計からも明らかとなったが、教育実習後に「教員採用試験への意気込み」が高くなっても、それが採用試験合格という結果に結びついていないのである。

だとすれば、スクールボランティアをすることの「効果」はどこにあるのだろうか。少し結論を先取りするようだが、表5は、4回生のみを抽出し、卒業後の進路とスクールボランティアの有無をクロス集計した結果である。

表5 卒業後の進路とスクールボランティアの関係

		なし	前のみ <sup>※26</sup>	後のみ <sup>※27</sup>	前後 <sup>※28</sup>
卒業後の進路	教師(講師)をする	11.8%(17)	34.8%(16)	40.0%(6)	39.7%(31)
	教師を目指す	38.9%(56)	30.4%(14)	40.0%(6)	39.7%(31)
	別の職業につく(未定)	49.3%(71)	34.8%(16)	20.0%(3)	20.5%(16)
※ <sup>26</sup> $\chi^2=9.977$ , df=2, p<0.01		※ <sup>27</sup> $\chi^2=12.879$ , df=2, p<0.01		※ <sup>28</sup> $\chi^2=28.977$ , df=2, p<0.01	

今後の進路については、教育実習後にスクールボランティアをした学生が最も「講師をする」と回答している。その他の活動時期も同様にスクールボランティアをした学生ほど「講師をする」と回答しており、逆に「別の職業に就く」と回答した学生ほどスクールボランティアをしていなかった。この点からいえば、スクールボランティアは、採用試験の可否に影響するものではなく、教職に就きたい、あるいは教職を目指す上において、その気持ちの継続性を保障する「効果」があるといえよう。

#### 4. スクールボランティアの有無が採用試験の可否<sup>(8)</sup>に与える影響について

これまでの分析で、スクールボランティアは採用試験の可否に直接的な影響を与えるものではないということが明らかとなった。そこで、ふたつめの分析視点である採用試験の可否に影響

表6 性別・学級委員経験・教職志望度と採用試験可否の関係

		合格	不合格
性別	男性	7.5%( 5)	92.5%( 62)
	女性	13.3%(10)	86.7%( 65)
学級委員経験	あり	9.8%(11)	90.2%(101)
	なし	12.9%( 4)	87.1%( 27)
教職志望度 (教師になりたい)	教育実習前	98.3%(14)	79.7%(102)
	教育実習後	100.0%(15)	89.1%(114)
	現在	100.0%(15)	79.7%(102)
	計	100.0%(15)	100.0%(128)

$\chi^2$ 検定の結果、有意差のある項目なし

響を与えている変数について検証していきたい。

表6は、性別、学級委員等の経験有無、教職志望度と採用試験の可否とのクロス集計の結果である。性別について「女性」の方が合格する傾向がみ

られるものの、性別、学級委員等の経験について、可否に影響するものではなかった。教職志望度については、合格した学生の方が総じて教職志望度は高いまま維持しているものの、有意差はみられず、可否に影響するものではないということがわかった。

では、成績の面ではどうだろうか。藤原正光（2004）によれば、男女で差があるものの教職を志望するのは「中学校」など早い時期であり、教職の進路を決定するのは「高等学校」であるとしている<sup>(9)</sup>。そこで、学生が回答した各校種での学業成績が「上の方」あるいは「中の上」と回答した学生を「上位」、「中」と回答した学生を「中位」、「中の下」、「下の方」と回答した学生を「下位」とし、中学校と高等学校での成績と可否をクロス集計したものが表7である。

表7 中学校および高等学校の成績と採用試験可否の関係

	中学上位			中学中位			中学下位		
	高校上位	高校中位	高校下位	高校上位	高校中位	高校下位	高校上位	高校中位	高校下位
合格	30.8%(4)	46.2%(6)	23.1%(3)	50.0%(1)	0.0%(0)	50.0%(1)	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)
不合格	51.9%(40)	24.7%(19)	23.4%(18)	38.5%(15)	51.3%(20)	10.3%(4)	54.5%(6)	18.2%(2)	27.3%(3)
n	44	25	21	16	20	5	6	2	3

$\chi^2$ 検定の結果、有意差のある項目なし

$\chi^2$ 検定の結果、有意差のある組み合わせはみられなかったが、教員採用試験合格者は、中学校の学業成績は「中位」以上で「上位」が86.7%を占めている。そこで、「中学上位」に注目してみると、高等学校の成績については、「中位」の学生がもっとも合格していることがわかる。すなわち、中学校も高等学校もよい成績というよりは、「中学校の成績は良かったが、高等学校では真ん中くらいだった」という学生が採用試験に合格しているという傾向をみることができる。

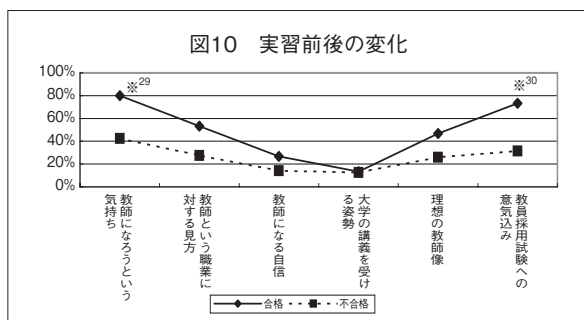
一方、表8は教育実習の成績を100点満点で自己評価させ、80点以上を「A評価」、70点～79点を「B評価」、60点～69点を「C評価」、59点以下を「D評価」として採用試験の可否とクロスさせたものである。

表8 教育実習の評価（自己評価）と採用試験可否の関係

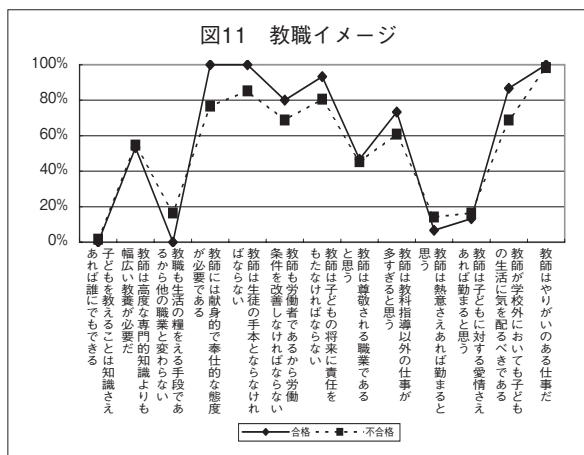
教育実習の評価（自己評価）		合格	不合格
教育実習の評価（自己評価）	A評価(80点以上)	11.1%(7)	88.9%(56)
	B評価(70～79点)	13.0%(6)	87.0%(40)
	C評価(60～69点)	4.0%(1)	96.0%(24)
	D評価(59点以下)	11.1%(1)	88.9%( 8)

$\chi^2$ 検定の結果、有意差のある項目なし

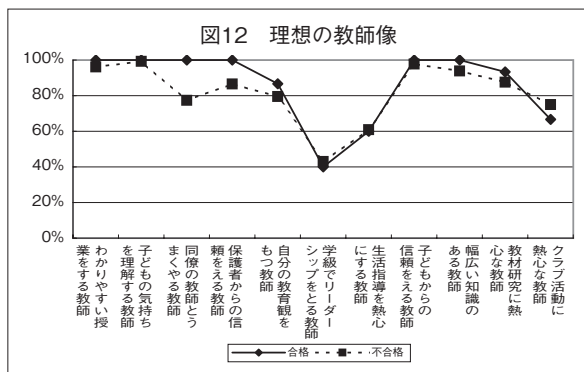
割合的には、「B評価」とした学生が最も合格しているが、自己評価による教育実習の成績は採用試験の可否には影響していない。この場合の自己評価は、学生自身が教育実習を「成功」だったと思うか「失敗」だったと思うかに置き換えて解釈することが可能だが、教育実習が成功したか否かは採用試験の可否には影響しなかったのである。少し結論を先取りすれば、採用試験の可否と教育実習の関係は、教育実習の成否よりも教育実習で何が変わったのかという点にあるといえよう。



※<sup>29</sup>  $\chi^2 = 7.738, df = 2, p < 0.05$  ※<sup>30</sup>  $\chi^2 = 10.208, df = 2, p < 0.01$



$\chi^2$ 検定の結果、有意差のある項目なし



$\chi^2$ 検定の結果、有意差のある項目なし

の教師像をイメージしている。

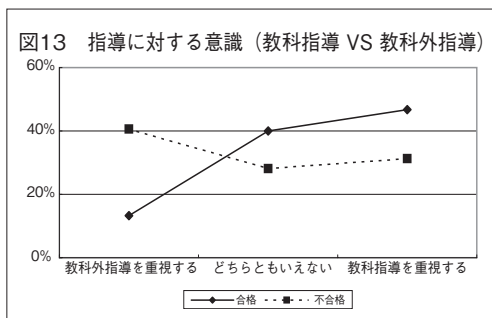
しかしながら、その一方で「労働条件を改善すべき」と「教科指導以外の仕事が多すぎる」と考え、「同僚の教師とうまくやる」や「保護者からの信頼をえる」ことも教師の理想だとも考えているのである。いずれも有意差はないものの、合格した学生の方が、「子ども」に対する視点だけでなく、周りとの協調することの重要性を理解していると解釈することができよう。

では、教育実習で何が変わったのか、変わらなかったのかといった点について詳しくみていきたい。まず、特徴的な結果がみられたのは、教育実習前後の変化である(図10)。教育実習を修了して、「教師になろうという気持ち(合格:80.0%, 不合格:42.5%)」や「教員採用試験の意気込み(合格:73.3%, 不合格:31.5%)」が良い方向に変化した学生、すなわち教職という職業に対するアスピレーションが強くなった学生ほど、採用試験には合格していることがわかる。

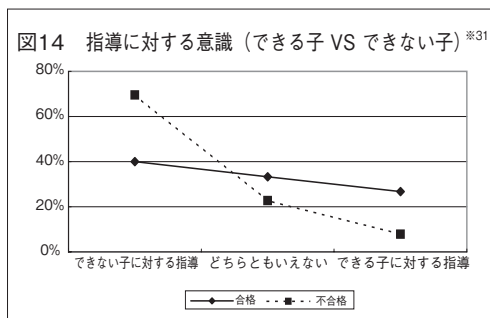
一方、教育実習後の「教職イメージ(図11)」、「理想の教師像(図12)」のいずれの変数にも採用合格に影響する変数は認められなかった。同様に「教育実習で見た現場の教師」についても有意な変数はなかった。しかしながら、合格した学生の方が、教師は「献身的で奉仕的な態度が必要」であり、「生徒の手本とならなければならない」し、「子どもの将来に責任」をもち、「学校外においての子どもの生活に気を配るべき」であると考え、「わかりやすい授業をする」ことや「子どもの気持ちを理解する」教師が理想であると考えている。すなわち、「子ども」という立場にたった聖職者としての

いずれにしても、学生自身の教職観が、採用試験の可否に直接結びついているわけではないということがわかった。つまり、「教職イメージ」や「理想の教師像」は、いわば「建て前」の部分であり、「このような教師でありたい」、「こういう教師になりたい」というのは教員採用試験に大きな影響を与えるものではないということである。

このような学生の教職に対する考え方について、さらに具体的に聞いた質問の中に興味深い結果がみられた。図13、図14は、学生に教師になったことを想定して、教師になったらどちらの指導にウエイトを置くかについて聞いたものである。



$\chi^2$ 検定の結果、有意差のある項目なし



<sup>\*31</sup>  $\chi^2 = 7.281$ ,  $df = 2$ ,  $p < 0.05$

まず、図13は、教師になった場合、科目を中心とした「教科指導」を重視するか、生活指導や課外活動など「教科外指導」を重視するかについての質問と採用可否のクロス集計である。ここでは有意差は認められなかったものの「教科外指導」よりも「教科指導」を重視する学生の方が採用試験に合格している傾向がみられる。

さらに、図14は、同様に教師になった場合、いわゆる「できる子」に対する指導を重視するか、「できない子」に対する指導を重視するかについての質問とのクロスであるが、やはり「できる子」に対する指導を重視すると回答した学生ほど採用試験に合格している（できる子に対する指導＝合格：26.7%，不合格：7.8%）。

つまり、教員採用試験の可否は、教職のイメージや理想よりはむしろ、現実的にどのような指導をするのかといった方が影響しているのである。さらに、こうした指導に対するウエイトについては、教職課程の講義において、「教科指導」と「教科外指導」、「できる子に対する指導」と「できない子に対する指導」のどちらも大切であることを理論的に学んでいるにもかかわらず、採用試験に合格している学生ほど「教科指導」や「できる子に対する指導」にウエイトをおくと回答しているという点には意外な感があった。

以上の結果から、採用試験の可否に影響を与えているのは、スクールボランティアの有無や教師という職業に対するイメージや理想より、大学までの学業成績や教育実習後の変化、さらには実際に教師になった時を想定した場合の指導に対する意識によることが明らかとなった。



## 5. 教員採用試験の可否を分岐する要因の検討

では、スクールボランティアとの関係の中で、最終的に採用試験の可否を分岐する最も大きな要因は何かについて分析し、2つめの分析視点の結論に変えたい。分析にあたっては、多変量解析において独立変数が質的データである場合の、いわゆる判別分析として数量化Ⅱ類を用いた。

本研究の目的は、スクールボランティアの有無が教員採用試験の可否に影響するのか否か、影響していないとすればもっとも影響している変数は何かを明らかにすることである。そのため、最終的に「スクールボランティアの有無」と先ほどのクロス集計において、採用試験の可否に影響していると思われる「性別」、「学業成績」、「実習前後の変化」「指導ウエイト」の14項目を投入して得た結果が表9<sup>(10)</sup>である。また、投入したダミー変数は表10の通りである。

その結果、採用試験の可否にもっとも影響を与えていたのは、「できる子に対する指導」と「できない子に対する指導」のどちらを重視するのかという項目であった。ここでは「できる子に対する指導を重視する」のウエイトが1.809とプラスに高いウエイトを示している。また2位も「教科指導」と「教科外指導」のどちらを重視するのかという、指導に対する意識に関する項目であった。ここでも「教科の専門性を重視する」が0.435とプラスに高いウエイトを示した。つまり、実際の指導にあたっては、「できる子に対する指導を重視する」「教科指導を重視する」学生が最も採用試験に合格するということになる。

3位は、実習前後で「教員採用試験への意気込み」が「かなり強くなった」が0.686となっており、採用試験に対する意気込みそのものが教員採用試験の可否に影響していることがわかる。さらに、4位に中学校の学業成績が「上位」であることが、採用試験の可否に影響していたのである。つまり、教員採用試験に合格するか否かを分岐する要因は、教育実習後に採用試験に対する意気込みが強くなるかどうか、中学校の成績、そして、「できる子」や「教科指導」を重視するか否かなのである。

本研究における分析の視点であった「スクールボランティアの有無」については5位であった。中でも「教育実習前後にわたって実施する」が0.387とプラスのウエイトを示していた。また、「スクールボランティアの期間・場所」については10位であった。この点から解釈すれば、スクールボランティアは教員採用試験の可否にはあまり影響しないが、活動するなら教育実習の前後にわたってする方が良いということになる。また、偏相関係数は低いものの「学校の中で長期にわたって実施」が0.128でプラスであったことから、スクールボランティアをするならば、学内で長期にわたってスクールボランティアをする方が良いといえるだろう。また、今回の分析の対象であった教育実習後のみ実施した学生は-0.515とスクールボランティアをせずに教育実習のみの学生(-0.278)よりもマイナスに最も高い値を示したことから、教育実習後に「急いで」スクールボランティアをしても、採用試験の可否という点においては、あ



表9 教員採用試験の合否を従属変数とした数量化Ⅱ類

 $\eta^2 = 0.567$ 

変数	カテゴリ	ウェイト	偏相関	順位
性別	男性	0.077	0.047	13
	女性	0.069		
スクールボランティア経験	実習前後にわたって実施	0.387	0.201	5
	実習後のみ実施	-0.515		
	実習前のみ実施	0.080		
	スクールボランティアなし	-0.278		
スクールボランティアの期間・場所	学校の中で長期にわたって実施	0.128	0.085	10
	その他の活動形態で実施	-0.186		
	スクールボランティアなし	0.071		
学業成績（中学校）	上位	0.296	0.238	4
	中位	-0.510		
	下位	-0.465		
学業成績（高等学校）	上位	-0.295	0.174	7
	中位	0.260		
	下位	0.228		
教職志望度	どうしても教師になりたい	-0.001	0.016	14
	できれば教師になりたい	0.038		
	教師になれなくてもよい	-0.091		
教師になろうという気持ち	かなり強くなった	0.250	0.139	8
	強くなった	-0.110		
	変化しなかった	-0.324		
教師という職業に対する見方	良い方向へ大きく変化した	0.430	0.192	6
	どちらかといえば良い方向へ変化した	-0.400		
	変化しなかった	0.006		
教師になる自信	かなり自信がついた	-0.455	0.123	9
	自信がついた	-0.034		
	変化しなかった	0.133		
大学の講義をうける姿勢	良い方向へ大きく変化した	-0.249	0.074	11
	どちらかといえば良い方向へ変化した	0.139		
	変化しなかった	-0.022		
理想の教師像	良い方向へ大きく変化した	-0.132	0.064	12
	どちらかといえば良い方向へ変化した	0.126		
	変化しなかった	-0.037		
教員採用試験への意気込み	かなり強くなった	0.686	0.272	3
	強くなった	-0.469		
	変化しなかった	-0.326		
教科指導と教科外指導	教科指導を重視する	0.435	0.281	2
	どちらともいえない	0.241		
	教科外指導を重視する	-0.579		
できる子に対する指導と できない子に対する指導	できる子に対する指導	1.809	0.360	1
	どちらともいえない	0.038		
	できない子に対する指導	-0.267		

表10 ダミー変数の一覧

変数	カテゴリ	ダミー変数
性別	男性	1
	女性	2
スクールボランティア経験	実習前後にわたって実施	3
	実習後のみ実施	2
	実習前のみ実施	1
	スクールボランティアなし	0
スクールボランティアの期間・場所	学校の中で長期にわたって実施	2
	その他の活動形態で実施	1
	スクールボランティアなし	0
学業成績	上位	3
	中位	2
	下位	1
教職志望度	どうしても教師になりたい	3
	できれば教師になりたい	2
	教師になれなくてもよい	1
教師になろうという気持ち	かなり強くなった	3
	強くなった	2
	変化しなかった	1
教師という職業に対する見方	良い方向へ大きく変化した	3
	どちらかといえば良い方向へ変化した	2
	変化しなかった	1
理想の教師像	かなり自信がついた	3
	自信がついた	2
	変化しなかった	1
教科指導と教科外指導	教科指導を重視する	3
	どちらともいえない	2
	教科外指導を重視する	1
できる子に対する指導と できない子に対する指導	できる子に対する指導	3
	どちらともいえない	2
	できない子に対する指導	1

まり意味がないということになる。スクールボランティアに注目し、活動時期をみるならば、教育実習の前後にわたって実施するのが最も効果的であり、続いて教育実習の前のみ、スクールボランティアをしないということになる。

## 6. スクールボランティアの可能性をめぐって

今回の調査は、教育実習修了後に実施したため、教育実習が影響していたと思われる。一言でいえば、教育実習前と教育実習後にスクールボランティアをした学生の違いは、教育実習が「ゴール」であったか「スタート」であったかである。それは、教育実習の前にスクールボランティアをした学生と教育実習のみの学生は、教職の「志望理由」、「教職イメージ」教育実習の「目的」など、多くの変数において同様の波形を示しており、教育実習後にスクールボランティアをした学生とは異なる結果がみられたが、教育実習後にスクールボランティアをした学生は、教育実習前後の変化として「教員採用試験への意気込み」がもっとも強かったことから明らかである。

つまり、教職志望度は高かったが、スクールボランティアをせずに、教育実習で初めて教育現場をみることで、「教師になろうという気持ち」や「教員採用試験への意気込み」が強くなったのである。その点からいえば、教育実習は教師という職業に就くための「スタート」であったといえよう。それに対し、教育実習前のみスクールボランティアをした学生にとって教育実習はひとつの「ゴール」であったことから、教育実習のみの学生と同じ波形がみられたと考えられる。しかしながら、実習後にスクールボランティアをした学生にとっては、教育実習後からのいわば「スロースタート」であり、教員採用試験に間に合わなかったといわざるをえない。

なぜ、実習前のみスクールボランティアをしたのか、実習後にしかスクールボランティアをしなかったのか。前後にわたってしたのはなぜか、こういった点についても今後分析していく必要があると思われる。

本研究の趣旨である、スクールボランティアの「効果」についていえば、スクールボランティアは、採用試験の合否という直接的な結果ではなく、「教師になろうという気持ち」を持続させる、さらに卒業後の進路において「講師をする」あるいは、違う仕事に就いたり、他免許を取得しながらでも「教師を目指す」という点に「効果」がみられた。羽賀敏雄(2003)らは、教育実習後に子どもたちとかかわる活動は、「教育実習では不完全であった学びの多くを補完するとともに、学生が教員採用試験に合格した後から教員として赴任するまでの接続の役割を果たしている<sup>(11)</sup>」と指摘しているが、教員採用試験に合格しなかった場合でも、活動が続けることは、「教員を目指す」というその後の進路決定に際して大きな役割を担っているのである。すなわち、スクールボランティアは、子ども、あるいは教育現場をみることで、教

師という職業に対するアスピレーションの継続性を担保したり、その後の進路に影響を与える「効果」があるといえよう。

さらに、こうした学生が実際に教壇にたった後、スクールボランティアの有無による違いがあるか、例えば子どもからの評価、同僚からの評価、保護者からの評価はどうかといった点について、追跡調査をすることもスクールボランティアの「効果」を測定していく上で重要な課題となると考える。

また、スクールボランティアを、学生が行う体験的諸活動ととらえるならば、この他にもスクールインターンシップなどがあげられる。本稿はインターンシップについては言及していないが、近年、教員養成のプロセスにスクールボランティアだけではなく、インターンシップ制度を教員養成カリキュラムに位置付ける養成機関も増えてきている。岡野勉ら(2004)は、国立の教員養成大学・学部における、4年次教育実習カリキュラムの編成動向をカリキュラムの主旨、目的の点から分析しているが、それによれば、正規的教育実習終了後の実践的なカリキュラムは、「教師としての力量を総体として形成すること」と「特に研究力量に重点を置いた形で教師としての力量形成を図ること」の大きくふたつの目的があり、それぞれの方向へ分化する形で編成されているとしている。またその点でいえば、インターンシップは前者の目的を有しており、スクールボランティアはその両方向の目的を有した活動という位置付けが可能であると指摘している<sup>(12)</sup>。こうした指摘から、スクールボランティアとスクールインターンシップも異なる活動であるとして、一部制度化された諸活動が、実践的教員養成にどのような点において異なるのかについても、今後は分析の対象とし、言及していきたい<sup>(13)</sup>。

# [注]

- (1) 藤枝静正 「教育実習学の基礎理論研究」 風間書房 2001 pp.178-189
- (2) 今津孝次郎 学生の内的側面からみた教師養成過程 「三重大学教育学部研究紀要」 第29巻4号 1978
- (3) 佐久間重紀 教育実習の多様化－動向と課題 「東京学芸大学紀要」 第1部門54号 2003 p.49
- (4) 教育実習とスクールボランティアが本来異なるものであるという仮説を立てたプロセスについては、「原清治・芦原典子『実践的教員養成のあり方に関する研究』 佛教大学教育学部論集第16号、2005」を参照
- (5) 原清治・芦原典子 実践的教員養成のあり方に関する研究 「教育学部論集」 佛教大学第16号、2005  
芦原典子・原清治 スクールボランティアがもたらす教育的効果の研究 「佛教大学教育学部学会紀要」 第4号、2005
- (6) 本研究が捉えているスクールボランティアは、「学生が自主的に行う教育活動」全般をさしており、交通費や給食費が支給される活動や、サークルやゼミ単位で行う活動もその分析の対象としている。また、児童館やスポーツ教室などその活動が学校内部にとどまらない活動についても同様である。
- (7) 藤原正光 教師志望動機と高校・大学生活～教員採用試験合格者の場合～ 「文教大学教育学部紀要」 第38集 2004 pp.75-76
- (8) 本研究は、最終的に可否を分岐する要因を明らかにすることを目的としているため、この場合の

- 「合格」は、2次試験合格者、すなわち現役で採用が確定した学生のみを「合格」としており、1次試験のみ合格した学生は「不合格」としている。
- (9) 藤原正光 教師志望動機と高校・大学生活～教員採用試験合格者の場合～ 「文教大学教育学部紀要」 第38集 2004 pp.77-78
  - (10) 教育実習を軸としてどの時期にスクールボランティアをしたのかという図1の関係モデルの分類を「スクールボランティア経験」として投入した。さらに、昨年度調査において明らかとなった、スクールボランティアの中でもっとも「効果」のみられた「スクールボランティアの期間・場所」も変数として投入している。
  - (11) 羽賀敏雄・吉崎聡子 教育実習を補完する体験的諸活動を経験した学生の成長 「弘前大学教育学部紀要」 第92号 2004 p.179
  - (12) 岡野勉・住野好久・濁川明男・林尚示 『国立の教員養成大学・学部における4年次教育実習カリキュラムの編成動向と課題』 新潟大学教育人間科学部紀要 第6巻第2号, 2004 pp.412-413
  - (13) この点について、教師教育学会第15回研究大会における発表の際、各方面からのご示唆をいただいた。その中で、今後、実践的教員養成は、教育実習などのフォーマルな部分に加えて、例えば塾の講師や家庭教師などのインフォーマルな形で行われる教育活動も視野に入れて考える必要があるという議論があった。スクールボランティアやスクールインターンシップは実践的教員養成において、両者の中間に位置するものとしてその機能と効果を測定し、そのあり方を考えていくこともできるであろう。

#### [参考文献]

- 原清治・芦原典子 実践的教員養成のあり方に関する研究—スクールボランティアと教育実習の関係から— 「教育学部論集」 佛教大学第16号, 2005
- 芦原典子・原清治 スクールボランティアがもたらす教育的効果の研究 「佛教大学教育学部学会紀要」 第4号, 2005
- 羽賀敏雄・吉崎聡子 教育実習を補完する体験的諸活動を経験した学生の成長 「弘前大学教育学部紀要」 第92号, 2004
- 高野和子 大学生の学校ボランティアをめぐる状況と課題 「教育」 55号 国土社, 2005
- 藤原正光 教師志望動機と高校・大学生活～教員採用試験合格者の場合～ 「文教大学教育学部紀要」 第38集, 2004
- 藤枝静正 『教育実習学の基礎理論研究』 風間書房, 2001
- 日本教師教育学会編『教師をめざす』学文社, 2002
- 佐々木正道 編著『大学生とボランティアに関する実証的研究』 ミネルヴァ書房, 2003

#### [付記]

本研究は、「教育実習およびスクールボランティアに関する調査研究」(研究代表者: 原清治)として2003年より行っている研究の成果の一部であり、教師教育学会第15回研究大会(2005.9.24, 北海道教育大学釧路校)における発表をもとに加筆したものである。

なお本稿は、はじめに、1, 5, 6を原が、2, 3, 4を芦原が担当したが、その責任は両者が等しく負うものである。

(はら きよはる 教育学科)  
(あしはら のりこ 佛教大学非常勤講師)  
2005年10月19日受理